

ふるさとの 育む人

#14「りんご」



育む人 齋藤 新作さん

横手市平鹿地区・61歳。JA秋田ふるさとりんご部会長として、約1,300人のりんご生産者をけん引する。りんご2ha、西洋なし30aを栽培。

この冬の記録的な豪雪はりんご農家を直撃

秋田県内の7割以上の生産量を誇る、JA秋田ふるさと産りんご。雪深い産地の豊かな気候が育む味わいには定評があり、全国に多くのファンが存在しています。

しかし、この冬の記録的な豪雪により、横手市内では、多くのりんご園地が壊滅的な被害を受けました。1月から2月にかけて集中的に降り続いた雪は、樹体に重くのしかかり、秋に実りをもたらす枝や幹そのものを、無残にも剥ぎ取っていったのです。雪害による果樹の被害額は、日に日に拡大し、りんごだけでも20億円を超えると見られています。また、約1,300人の生産者でつくる当JAりんご部会では、今年度の出荷量は、例年の5割程度に落ち込むと見えています。



雪害に負けたとは言わせたくない



「園地は俺たちの“職場”。俺たちにはここしかない。1本でも多くの木を救おう」一。

この冬の降りしきる雪の中、自らの園地の除雪を行いながら、他の生産者たちを鼓舞し続けたのは、今年、りんご部会長4年目を迎えた齋藤新作さんです。「『横手が雪害によって駄目になった』とは言わせたくない。りんごづくりを守ることは、地域の基盤を守ることだ」と、生産者としてのプライドを奮い立たせてきました。

りんご部会では、JAや行政との連携を図り、様々な雪害対策を実施。復旧を図るための栽培技術の講習を重ねながら、国などが示した各種補助事業について積極的に情報を共有し、経営を継続しながら園地を修繕していく道筋を、早くも描いています。

雪害を、産地再構築のチャンスに一。未来を見据え、明日の復興を目指す

思えば、昭和48年のいわゆる『48（ヨンパチ）豪雪』から、多くの農家が復旧を図り、今日の産地を築いてきました。いまでは横手産の“顔”となった主力品種『ふじ』も、実は、当時の豪雪を機に作付品種の転換を図ったもので、それまでの主流品種『スターキング』や『ゴールデン』からの脱却後、『ふじ』の市場人気は上昇。今日の横手産を支える看板品種は、雪害を機に、さらなる“高み”を目指した結果もたらされたものなのです。



当時の経験を踏まえ、「いまは苦しいが、雪害はさらに良い産地に再構築していくためのチャンスだ」と力を込める齋藤さん。「いまは、産地がより良くなるために、品種や品質を見直す時期。数年後、十年後に、『あの豪雪が良い転機になった』と皆が笑顔で言えるように」と、前を見据えます。

初夏を迎え、緑の鼓動がひしひしと感じられるこの季節一。横手のりんご農家のみなさんはいま、並々ならぬ決意を持ち、立ち上がっています。